

植民地朝鮮の師範学校における「内地人」生徒：官立大邱師範学校を中心に

山下, 達也
九州大学大学院人間環境学府

<https://hdl.handle.net/2324/14689>

出版情報：歴史学研究. 819, pp.23-31, 2006-10-15. The Historical Science Society of Japan
バージョン：
権利関係：



植民地朝鮮の師範学校における「内地人」生徒

—官立大邱師範学校を中心に—

山下 達也

はじめに

I 大邱師範学校の「内地人」生徒

II 朝鮮人生徒との関係

おわりに

はじめに

植民地朝鮮における朝鮮人初等教育は、植民地支配の円滑化を図る日本にとって重要な政策であった。その担い手とされたのは初等学校教員であり、なかなか指導的立場にあったのは植民者たる「内地人」教員であった。それゆえ、「内地人」教員の養成は、朝鮮総督府が教育による朝鮮民族支配の要諦として尽瘁した政策であったといえる。すなわち、「内地人」教員の養成段階に着目し、その内実を明らかにすることは、教育を支配維持のための一手段とした日本の朝鮮植民地支配の構造をより明確にするために必要であるといえよう。

本稿は、官立大邱師範学校の事例を中心に、師範学校における「内地人」生徒についていくつかの知見を導き出し、その実態に迫ろうとするものである。大邱師範学校は、1929年、官立京城師範学校に次いで植民地朝鮮における第二の官立師範学校として設立され、朝鮮南部における師範教育の中心的存在であった。

植民地朝鮮の師範学校における「内地人」生徒の実態を解明するにあたり、まず、朝鮮に在住していた「内地人」、すなわち在朝日本人に関するこれまでの研究を踏まえたい。これまで、在朝日本人社会が、朝鮮総督府を頂点とし、朝鮮人社会の上に君臨する植民者社会であったことや、多くの在朝日本人は自分たちで生活の場を形成し、そこに集住したため、朝鮮人と直接関わる機会はほとんどなかったことが明らかにされている。また、在朝日本人は、

「内地」からはじき出された、あるいは自ら生活の場を求めて朝鮮へ渡航した一種の脱落者である一方、朝鮮においては侵略の先頭になつ、紛れもない植民者であるという複雑な立場にあったことが指摘されている。これらは、在朝日本人にある程度共通していたものとして首肯できるが、彼／彼女らの生活様式や精神構造は決して一様ではなかったはずである¹⁾。

次に、植民地朝鮮における師範学校、とりわけ本稿でとりあげる大邱師範学校に関する先行研究についてであるが、これまでは、主として抗日運動や民族意識継承運動といった朝鮮人生徒の視点からの研究がなされてきた。片桐芳雄は、1938年に朝鮮人生徒の一部が朝鮮語の仮設随意科目化に抗し、朝鮮語の民謡集を発刊して処分された「民謡集発刊事件」や、1939年、朝鮮人生徒による「内地人」教員への暴力事件である「倭館抗日学生事件」、朝鮮語の文芸誌『蛍の光』が発見されたことで朝鮮人生徒の秘密結社活動が露頭し、1943年に生徒らが実刑宣告を受けた『『蛍の光（パンディップル）』事件』など、大邱師範学校で行なわれた抗日運動の内容とその展開過程を明らかにしている²⁾。イ・ギフンは支配への抵抗だけでなく、時期によっては日本帝国主義を受容していた、あるいはそうせざるをえなかった生徒像を描きだしている³⁾。また、朴永奎は大邱師範学校の朝鮮人生徒が「地域的には慶尚北道の出身がもっとも多く、また、大部分は農業をはじめとする一次産業に従事する家庭の出身」⁴⁾であることや、「1945年以降も多数の生徒が学校長または教育長として活躍し、韓国教育界に多大な影響を及ぼした」⁵⁾ことを明らかにしている。これらによって大邱師範学校における朝鮮人生徒の実像は明らかになりつつあるが、「内地人」生徒に関しては、その実

相にまで踏み込んだ研究が、これまで充分に行なわれてきたとはいいがたい。

以上のことを踏まえ、本稿では、「内地人」生徒という集合内における多様性の探求と、朝鮮人生徒との異同、関係性の解明によって、師範学校における「内地人」生徒の実態を浮き彫りにしたい。

I 大邱師範学校の「内地人」生徒

植民地朝鮮における教員養成システムは、当初、独立した教員養成機関を持たず、「内地人」教員・朝鮮人教員ともに中等学校の附属機関⁶⁾において養成するというものであり、その不足は、「内地」からの招聘によって填補されていた。しかし、初等学校増設による教員需要の増大に伴って教員養成システムの拡充が図られ、1921年4月、朝鮮総督府師範学校が設立された。翌1922年の「第二次朝鮮教育令」では「師範教育ヲ為ス学校ハ師範学校」⁷⁾とされ、以後各地方に公立（道立）師範学校が設立されることになった。

植民地朝鮮における師範学校体制は、「内地」のそれとは若干異なる。朝鮮の師範学校には、高等師範学校、尋常師範学校といった名称、区分はない。ただ、設置された学科、修業年限、卒業後に与えられる資格に違いが存在した京城師範学校（1922年、朝鮮総督府師範学校を改称）⁸⁾と、その他各道所在の師範学校とは、区別して論じることができる。敷衍すると、京城師範学校には普通科、演習科が設置され、この課程を修了すると第一種教員免許状が取得でき、普通科、演習科の両科が設置されていないその他、各道所在の師範学校の生徒は卒業後、第二種教員免許状を取得した。すなわち、朝鮮には、京城師範学校を頂点とする師範学校体制が構築されたといえる。

京城師範学校は生徒募集の際、「内地人」・朝鮮人を問わない、いわゆる「内鮮共学」制を採っていたが、実際は「内地人」生徒が大多数を占めていた⁹⁾。一方、各道所在の公立師範学校では、朝鮮人生徒が圧倒的多数であり、官立大邱師範学校の前身である慶尙北道公立師範学校も例外ではなかった。

1925年度の他の12道の公立師範学校在学者数の平均が112名であるのに対し、慶尙北道公立師範学校

の在学者数は213名でもっとも多く、経費（予算額）は、他校の平均が約3万8193円であるのに対し、7万0541円と多大である。また、1927年度についてみても、他の公立師範学校在籍者数の平均が133名であるのに対し243名、経費（予算額）は平均約4万1697円に対し7万4887円である¹⁰⁾。これらの数字から慶尙北道公立師範学校が他の12道の公立師範学校に比して大規模であったことが窺える。1929年4月、「師範学校規程」の改正によって、公立師範学校の廃止が決定し、同年から1944年にかけて各地域に官立師範学校が漸次設立されることになるが、他の公立師範学校に比して大規模であった慶尙北道公立師範学校は1929年4月にいち早く官立化され、官立大邱師範学校となった（この時、平安南道公立師範学校も官立平壤師範学校となった）。

大邱師範学校には、尋常科、演習科、講習科¹¹⁾があった。尋常科の入学資格は尋常小学校卒業程度以上、修業年限は5年であった。演習科には、修業年限5年の普通科を修了した者、中学校もしくは修業年限4年の高等女学校を卒業した者、または朝鮮総督の定めるところによりこれと同等以上の学力があると認められた者が入学でき、その修業年限は1938年までは1年、それ以降は2年であった。講習科は、「小学校教員ノ学力補充ニ必要ナル講習ヲ為スモノ」¹²⁾とされ、講習期間は小学校教員たらんとする者は1年以上、尋常小学校教員たらんとする者は6カ月以上とされた。また、入学できるのは、修業年限2年の高等小学校の卒業者または14歳以上でこれと同等以上の学力を有する者とされた。この講習科の特徴は、短期間で教員を養成するという点にある。つまり、演習科、講習科は初等教育よりも高水準の教育を受けた者、またはこれと同等以上の学力を有するものが教員として養成される科であったのに対し、本稿で焦点をあてている尋常科は、「内地人」であろうと朝鮮人であろうと、おもに初等学校卒業者を教員として養成するための科であった。

大邱師範学校尋常科には1929年以降、毎年100名程度の生徒が入学し、その中には「内地人」生徒も含まれていた。1929年度から1945年度までの大邱師範学校生徒募集要項をみると、いずれも「募集人員」の欄には「官費生～名、私費生～名」という区

表 大邱師範学校尋常科入学者数 (単位:人)

年度	入学者数		
	「内地人」	朝鮮人	計
1929	10	93	103
1930	9	91	100
1931	8	88	96
1932	10	90	100
1933	18	82	100
1934	8	90	98
1935	10	90	100
1936	9	79	88
1937	9	81	90
1938	10	91	101
1939	14	86	100
1940	12	96	108
1941	10	90	100
1942	15	95	110

典拠:※「大邱師範尋常科誌」大邱師範尋常科同門会, 1991年, 136頁より作成。

分が記されているだけで、「内地人」・朝鮮人の割合は特に定められてはいない¹³⁾。

表は, 1929年から1942年までの「内地人」生徒, 朝鮮人生徒それぞれの入学者数を示している。「内地人」生徒と朝鮮人生徒との割合は毎年ほぼ1対9に保たれていることから, 毎年入学定員の1割は「内地人」生徒枠として確保するという暗黙の了解が存在していたものと考えられる。

次に卒業者数についてみると, その総数は1025名であり, そのうち「内地人」生徒は98名(9.6%)であった。在朝日本人の増加と兵役延期制度, 専門学校への昇格などによって師範学校への進学を志願する「内地人」が増加し, 1943年度以降は「内地人」生徒数が増加するものの, 大局的にみれば大邱師範学校尋常科における「内地人」生徒は少数であった。

「内地人」生徒は, 師範学校入学前までの生活の場の違いによって2つのタイプにわけることができる。ひとつは「内地」で生れ育ち, 師範学校入学のために「内地」から朝鮮へ渡ったタイプであり, もうひとつは朝鮮で生れ育った, すなわち師範学校入学前も朝鮮で生活し, 朝鮮の小学校へ通ったタイプである。両者がどれほどの割合であったかを数的に解明するのは困難であるが, 元「内地人」生徒への聞き取り調査¹⁴⁾により, 両者は単に「内地」・朝鮮という成長の場の違いを有するだけでなく, その性

格をも多少異にしていたことが明らかになった。本稿では, 前者を「内地」成育型, 後者を朝鮮成育型という言葉で捉える。

以下, 両者の相異が顕著にあらわれ, 各タイプの特質を窺い得る, 師範学校への進学動機や修学旅行での「内地」訪問についての考察を行なう。

1 師範学校進学動機

まず, 「内地」成育型生徒が朝鮮の師範学校への進学を決定した過程についてみる。大正期, 「内地」における教員の待遇, 社会的地位は著しく低下しており, 「その物質的待遇の低き為め妻子の衣食に窮して後顧の憂なく, その職に従事すること能はざるのみならず, 常に読書に親みて実力を養成すべきことの必要なるは十分承知せるも悲哉現今の薄給を以てしては到底書を購ふ丈の余裕」¹⁵⁾ もないほどであった。このような状況に伴って教員養成機関である師範学校への入学志願者は1913年度以降減少の一途を辿り, 「入学生の素質低下し, 其の学力品性性格に關し, 年々不良の現象を呈」¹⁶⁾ していた。昭和期に入ると, 「内地」は戦後恐慌, 震災恐慌, 金融恐慌によって不況となり, さらに官立大邱師範学校が設立された1929年には世界恐慌が勃発し, その影響をうけた「内地」には失業者が急増した。このような「内地」の状況は, 「内地」成育型生徒の朝鮮の師範学校進学を促す一因となっていたと考えられる。たとえば, 「内地」成育型の卒業生である藤井祐正(尋常科第2期生)は, 大邱師範学校への進学動機について次のように述べている。

いちばん大きかったのは経済的要因です。世界恐慌の影響を受けて日本も不景気になり, 失業者が溢れました。このような状況の中, 朝鮮で教員になれば「内地」の2倍ほどの給与がもらえるし, 教員の地位も高いという話を聞いたのです¹⁷⁾。

朝鮮の小学校および普通学校の教員は判任官であり¹⁸⁾, 「内地人」教員には本俸の6割の加俸¹⁹⁾や宿舍料²⁰⁾等が支給されたうえ, 朝鮮内旅行をする場合, 「朝鮮総督府旅費規則」に則り旅費が支給された。このような待遇が「朝鮮で教員になれば『内地』の2倍ほどの給与がもらえる」という漠然としたかた

ちで認識され、その経済的利点に惹かれて朝鮮の師範学校への進学を決心したのである。

また、京城師範学校へ入学した「内地」成育型の桜井朝治は、朝鮮へ渡った理由を次のように記している。

朝鮮に師範学校ができ、生徒募集の要項が校内に流れていた。それによると、朝鮮での給料は日本内地の二倍だという。貧乏生活からの脱出は朝鮮に渡るに限ると考えた。あれこれ迷うことなく直ちに願書を出した²¹⁾。

このような「内地」成育型生徒の進学動機と類似したものとして、師範学校教諭の赴任動機をあげることができる。大邱師範学校の教諭であった岸米作（勤務期間1929～1939年）は朝鮮の師範学校へ赴任することを決心した経緯について、次のように記している。

私が高師〔広島高等師範学校——山下注〕を卒業して赴任したのは、昭和三年五月、朝鮮の慶尚北道公立師範学校だった。その頃の政治経済状態は悪化の一途をたどっていたようで、労働争議は頻発し、失業者は続出するしで、前年の昭和二年三月には金融恐慌がおき、四月には台湾銀行に取り付けさわぎがおき、その波及をおそれて、政府は全国に三週間のモラトリアム（支払猶予）を施行、全国の取引所は、いっせいに休業に入るという不景気もどん底のありさま。高師を卒業したものの教員の就職口もないという有様だった。三月四月とぼんやり過した私に、口がかかったのが五月初め、朝鮮の道立師範学校だがどうかと母校からの声、朝鮮ときいて、いわゆる万歳運動のあった植民地ということなので、いささかたじろいだが、無職でゴロ寝しているわけにもいかないので、赴任を決心し、文部省からの出向辞令をうけることにした²²⁾。

この経済的な面に関する「内地」成育型生徒の進学動機や師範学校教諭の赴任動機は、加俵や手当、就職口等を誘因として「内地」から人材を確保せんとする政府の思惑とその影響の一端を窺わせるものである。

一方、朝鮮成育型生徒にとって、師範学校へ進学

することはどのようなものとして捉えられていたのであろうか。師範学校教諭の岸米作が「教師という職業は尊敬される風土だ」²³⁾と認識するほど当時、朝鮮における教員の地位は高く、その待遇も前述したとおり、「内地」に比して良好であった。このような状況は朝鮮成育型生徒の進学動機に少なからず影響を及ぼした。たとえば、朝鮮成育型の卒業生である石井忠雄（尋常科第3期生）は、師範学校へ進学することに対して抱いていた思いを次のように述べている。

師範学校へは小学校の頃から自分で行きたいと思っていました。朝鮮の人たちはみな先生のことを尊敬し、大切にしていたから、自分がそうなることは誇らしいことだと思っていました²⁴⁾。

朝鮮で生まれ育った石井は、師範学校へ進学すること、そして将来、教員になることに対して、憧憬の念を抱いていたのである。

また、朝鮮成育型生徒は、朝鮮に住む「内地人」として、「内地」成育型生徒とは異質な教育を受けていた。在朝日本人教育の特殊性と重要性に関し、弓削幸太郎は次のように述べている。

朝鮮に於ては朝鮮人の教育が甚だ重要であることは言を俟たないところであるが、然しながら朝鮮に於ける母国人の教育も亦甚だ重要な点に於て朝鮮人教育に比して少も譲らない。在鮮母国人は日夕朝鮮人に接触して居る人々である。在鮮内地人学校生徒は将来の朝鮮研究者として、将来の我が国情紹介者として、将来の朝鮮開発者として、将来の朝鮮理解者同情者として其の使命を完ふする様に特に注意して教育せねばならぬ。……即ち朝鮮問題は内地人教育に俟つこと多大なるものあるを確信す。在鮮内地人の教育は内地に於て内地人を教育するより以上に種々なる点に於て困難なる事情があると同時に又興味多き事業と云はねばならぬ²⁵⁾。

朝鮮成育型生徒は幼少期から将来、朝鮮を担っていかなければならぬという責任と期待を背負いながら成長した。そのため、「忠良ナル国民ヲ育成」²⁶⁾するという「重要な」役割を担う教員になるため師範学校へ進学することは、まさに「誇らしいこと」で

あった。また、学校側にとってこのような朝鮮成育型生徒は、朝鮮に関する知識や、将来、朝鮮を担っていくという自覚が稀薄な「内地」成育型生徒を感化するのに好都合な存在であったといえよう。

2 「内地」体験

朝鮮成育型生徒の師範学校における「内地」体験は、まず「内地」成育型生徒との出会いであった。「内地」成育型であった藤井祐正は、「寄宿舎では、朝鮮で育った日本人の友人に、日本のことをいろいろと話してやりました」²⁷⁾と語っている。「内地」成育型生徒は、朝鮮で生れ育ち、「内地人」でありながら「内地」に行ったことのない朝鮮成育型生徒が、「内地」を身近に感じ、憧れるのを助長する存在となっていたのである。

このように、朝鮮成育型生徒は、「内地」成育型生徒から話を聞くことによって「内地」に関する知識を得ていたが、それはあくまで間接的なものであった。朝鮮成育型生徒が「内地」を直接体験する機会となったのは、修学旅行による「内地」訪問であった。

1910年末、朝鮮には17万1543人の「内地人」が在住しており、その後、「内地人」の数は、「第二次朝鮮教育令」が公布された1922年には38万6493人にまで増加した²⁸⁾。併合以降、在朝鮮「内地人」の増加に伴い、その家庭に「内地」を知らない子どもが増えていることを憂慮した幣原坦は次のように述べている。

朝鮮生れの子供がますます多くなり、従つて内地を知らない者の増加することは免るべからざる勢である。内地に於ても、遠く隔つてゐる地方の者は、互に知らずして過ごしてゐるのであるから、在朝鮮の内地人が次第に内地に遠かるのも、如何ともすることが出来ない。……而して成るべく修学旅行等の機会を作つて、内地を知らしめ、祖先発祥の地を踏ましめるを可とする。内地に於いては、国民の気象はおのづから統一せられて、此の国に住み馴るれば、所謂もろこし人も高麗人も大和心になるのである。それですらも、旅行は識見を広めるものであるから、今日の如き交通の便の開けた時に於ては、

成るべく各地を見比べて、己れの地方の足らざる所を補ふ必要がある。彼の旧幕府時代に於て、交通が不便なるにも係らず、各地に伊勢詣での行はれたのは、国民思想を統一する上に、大なる意味があつたのである。此の意味に於て、朝鮮各地の先覚者は、時々青年を内地に送るのが良い²⁹⁾。

「修学旅行等の機会を作つて、内地を知らしめ」る試みは大邱師範学校においても行なわれた。時局の影響により延期・中止された時期もあったようだが、基本的には最終学年時に修学旅行として2週間程度「内地」へ行っていた。生徒たちにとって「修学旅行は在学中、楽しい行事のひとつ」³⁰⁾であった。釜山・下関間の連絡船で下関に到着後、門司、北九州の名所・古跡を巡った。その後、別府を経て京都、奈良、大阪、東京という行程であった³¹⁾。また、京都の比叡山では、山頂で「琵琶湖を見渡し、桜満開の中で食事」³²⁾したという。

「内地人」でありながら、それまで「内地」へ行ったことのなかった朝鮮成育型生徒の石井忠雄は、修学旅行の感想として、「日本は修学旅行で来たのが私にとって初めてでしたからうれしかったですね。憧れの日本でしたから。日本の方が文明的に進んでいると思いました。日本はいいなと思いましたし、自分も日本人でよかったと思いました」³³⁾と述べ、「内地」への憧れと「内地人」であることの誇りを感じている。しかし、その一方で、「日本では朝鮮に対する差別意識が強かった」³⁴⁾という印象を受けている。このような「内地」に対する印象は、当時、同じ大邱府内にあった大邱公立高等女学校における生徒の「内地」訪問の感想の中にも、「朝鮮に対する認識不足だ。『朝鮮から来ました』と云えばすぐ懐中物用心をなさる彼等、其認識不足にはあきれざるを得なかった。今少し国際的な大国民の襟度を保ち、同胞を認識してほしい。同胞を抱擁してほしい。同胞を愛してほしい」³⁵⁾とか、「『朝鮮から来ました』とでも云はうものならガラリと態度を変へて、心に武装をする東京の人達を至る所に発見して私は全く幻滅の悲哀を感じました」³⁶⁾といった形であらわれている。

朝鮮成育型生徒が「内地」を訪問するということ
植民地朝鮮の師範学校における「内地人」生徒（山下） 27

に込められた目的は、弓削の「日本人として、一等国民の面目を保つの自覚と決心とを得しめたいのである。而して此の自覚が強ければ強くなる程、新附の朝鮮人に対しても同情的理解を起し、寛容の精神を以て之を待つ自重心を生ずるであらう」³⁷⁾ということばに収斂している。実際に生徒の感想からは「内地人」意識の昂揚を窺い得る。しかし、同時に、「内地」に住む人々が朝鮮に対して強い差別意識を持っていることに失望することもあった。在朝日本人社会はあくまで植民者社会であり、朝鮮成育型生徒も朝鮮人、あるいは朝鮮社会に対して差別意識を持っていなかったとは断じていえない。ただ、ここで強調したいのは、「内地」に住む人々が朝鮮人のみならず、在朝日本人に対しても差別意識を持っていることに、彼／彼女らが幻滅したことである。

「内地」成育型生徒にとって「内地」への修学旅行は一種の帰省であったが、朝鮮成育型生徒は、「内地人」としての自覚を強める一方、自分たちとは異なる、「内地」に住む「内地人」、「内地」で育った「内地人」（すなわち「内地」成育型）との精神上的距離を感じている。すなわち、修学旅行としての「内地」訪問は、同じ「内地人」でありながらも、「内地」成育型生徒と朝鮮成育型生徒とでは、その精神構造が異なることを際立たせる機会でもあった。

II 朝鮮人生徒との関係

大邱師範学校における「内地人」生徒は少数であり、あくまでも彼らは特殊な存在であった。ここでは、尋常科の大多数であった朝鮮人生徒との比較や両者の関係性の解明により、「内地人」生徒の特性を浮き彫りにすることにしたい。

1922年、「師範学校規程」によって授業時数や授業科目、使用する教科書、寄宿舎生活、教育実習、修業年限などが定められた。これら制度的な面においては「内地人」生徒と朝鮮人生徒との間に相違は見当たらない。しかし、京城師範学校校長を務めた渡邊信治（在任期間は1930～1940年）は、「内地人」と朝鮮人の「融合一体」について在任中、次のように述べている。

朝鮮教育の使命は飽くまでも民族一体観に立脚

して我か同胞国民の幸福の増進と文化の向上とを期し、各其の所を得しめ永く文化昇平の恵沢に浴せしむるに存する。然るに実際の状況を見るに、この理想は余りに高遠にして、その融合一体の実現は蓋し困難なるの感なきにあらず。中には、不可能の問題として考ふることか寧ろ当然なるか如き感を有するものさへある³⁸⁾。

師範学校では制度的に同様な環境のもと、「内地人」生徒と朝鮮人生徒の「融合一体」化が理想として掲げられてはいたものの、実際、両者の間には解消することが困難、あるいは不可能だと思われる相違が存在し、当事者たちもその理想と現実の乖離を自覚していたのである。

まず、「内地人」生徒と朝鮮人生徒とでは入学競争率に大きな差があった。両者の入学競争率を比べてみると、朝鮮人学生のそれが圧倒的に高い。たとえば、1933年度、「内地人」は入学志願者数56名中入学したのは18名（競争倍率は約3倍）であるのに対し、朝鮮人は入学志願者数994名中入学者は82名（競争倍率は約12倍）であり³⁹⁾、最後の入学試験となった1945年度についても「日本人は3：1程度の入学競争率と低かったが、韓国人は28：1という熾烈な競争」⁴⁰⁾であった。

この入学競争率の差は学力に反映している。朝鮮人生徒は「日本人学生とは比較できない優秀な資質と明晰な頭脳を持つ秀才」⁴¹⁾と自負しており、「うぬぼれと自嘲交じりで、『師範学校尋常科は、天才の捨て箱だ……』と言って」⁴²⁾いた。また、自分たちよりも学力が劣っていた「内地人」生徒たちをからかっていたという⁴³⁾。朝鮮人生徒の優秀さは師範学校教員も認めるほどであった。岸米作は朝鮮人生徒の優秀さについて次のように記している。

それぞれの出身学校の選びぬかれた優等生ぞろい、入試の選考には、学校側としては頭をいためるわけである。なるべく早目に採点ができ、しかも正誤に正確を期し、ふりわけのできる方法は、などと論議し、国語担任の教師が、採用されて実施されたこともある。それは、国語試験の問題に「君が代」の書写をさせる、今思うと随分荒っぽいことをしたものだと思やまれるが、採るより落とすことに視点をおくので、や

むを得ないのだと、教師たちは気^(ママ)安めを云い合ったものだが。……国語、算術、理科などの関門をくぐり抜ける子供たちは、皆優秀な成績で及落は紙一重の差となる。だから入学生は粒ぞろいの優等生、私は高学年になって始まる心理学とか教育学とか教授法とか授業をうけもったのだが、試験の答案に、テキストの一字一句もまちがいのない正答の何枚かにしばしばぶつかったことを覚えている。カンニングなど絶対不可能な教室の中である。その記憶力の優秀さには、舌を捲く程であった⁴⁴⁾。

また、朝鮮人生徒、「内地人」生徒が混在した寄宿舎での生活にも両者の違いをみることができる。1931年の満州事変勃発以降、日本兵が「内地」から釜山に上陸し、満州に向けて汽車で朝鮮半島を北上するようになると、その頃から大邱師範学校の寄宿舎では、「内地人」生徒のみが集められ、「内地人」教員とともに大邱駅を通過する汽車を見送った。この時の思い出を藤井は次のように語っている。

日本から兵隊がどんどん満州に汽車で送られて大邱駅を通過していました。それが夜中の12時だったり1時ごろなんですよ。私たちはそれを見送りにしていました。見送りのある日は、教練の先生たちが私たち日本人だけに「今晩は12時から兵隊を見送りに行くぞ、正装して出て来い」と言っていました。朝鮮人の学生には声はかけられず、私たちだけでした⁴⁵⁾。

また、石井も「私たち日本人の学生はわざわざ駅まで行って万歳、万歳と言って見送っていましたが、朝鮮人の学生はまったく関係ありませんでした」⁴⁶⁾と証言している。汽車の見送りは「内地人」生徒のみが対象となったものであった。

一方、朝鮮人生徒に対してのみ行なわれたものもある。特筆すべきことは生徒個人の所持品検査である。検査の様子と、それに対する朝鮮人生徒の反応は次のとおりである。

時々、生徒たちが全員登校した後、舎監たちが机の引出しや押入れなどを調べ、朝鮮人生徒の所持品を検査した。特にその対象となったのは、思想関係の書物、朝鮮語のノート、日記などであった。寄宿舎に戻ってこのことを知った朝鮮

人生徒は「これは朝鮮人に対する弾圧である」と憤慨し、寄宿舎の日本人生徒にその怒りをぶつけた⁴⁷⁾。

生徒の所持品に関しては、「師範学校教科教授及修練指導要目」の中の「寮舎修練」における「指導上ノ注意」に、「一、寮生ノ所持品ヲカメテ簡素ナラシムルト共ニ常ニ之ガ整理整頓ニ留意セシムベシ」とある。すなわち、生徒の所持品から無駄で不必要なものを除き、乱れた状態にあるものを整え、秩序正しくするという名目で所持品検査が行なわれたのであるが、その実状は朝鮮人生徒の所持品に対してのみ、しかも内密に行なわれ、「人権無視もいいところ」⁴⁸⁾であった。

また、「内鮮共学」制を採っていた学校の運営に関しては、次のような意見が流布しており、大邱師範学校も少なからずその影響を受けていた。

内鮮共学の成果を挙げて行くためには、内鮮生徒の割合を適当に規制し、特に内地人生徒に優秀な指導的人物を得るように努力することが肝要である。もとより、朝鮮在籍生徒の中には、その知能や成績において内地人の水準を凌駕するものが稀でないが、学園または学級の統率については、大体としてはなほ内地人にその人を求めなければならぬ⁴⁹⁾。

朝鮮人生徒の証言によると、寄宿舎の室長など、リーダー的役割に充てられるのは「内地人」生徒であった⁵⁰⁾。すなわち、朝鮮人生徒に比して学力が劣り、朝鮮人生徒に卑下されることさえあったにもかかわらず、イニシアティブは常に「内地人」生徒に求められたのである。また、京城師範学校においても、「組生長（級長）を選挙し、韓国籍の者を推したところ、上級生の一部から私たちは笑われた」⁵¹⁾という。この証言から、学級のリーダーたる「組生長」には、「内地人」生徒を選ぶのが通例となっていたことが窺える。

これらは、教員養成機関である師範学校において、「内地人」生徒の存在が重視されていたことを示すものである。

結 論

本稿では、民族意識を持ち、抗日運動の担い手、植民地朝鮮の師範学校における「内地人」生徒（山下） 29

支配への抵抗者として語られる従来朝鮮人大邱師範学校生徒像とは異質な、大邱師範学校「内地人」生徒像を明らかにした。

本稿ではまず、官立大邱師範学校の「内地人」生徒という枠組みの中にも、「内地」成育型と朝鮮成育型という異なる2つのタイプが存在していたことに着目した。

両者の特質は、師範学校進学へのモチベーションにあらわれていた。「内地」成育型生徒は、おもに経済的要因が強かったのに対し、朝鮮成育型生徒の進学動機には、教員という職業への憧憬の念を窺うことができた。このような相違は、師範学校入学までに過ごしたそれぞれの環境における経済状況（景気）や教員の待遇、地位といったものの違いに起因したものであった。

また、「内地」成育型生徒は朝鮮成育型生徒に対して、「内地」への憧憬を喚起する存在として、一方、朝鮮成育型生徒は「内地」成育型生徒に対して、将来朝鮮の教育を担う者として感化する存在となっていたことも、それぞれの有するバックグラウンドの相違に起因していた。

さらに、修学旅行で「内地」を訪問した際に顕在した意識の背離から、両者の精神構造は異なるものであったことを明らかにした。特筆すべきことは、「内地」を訪れた際、朝鮮成育型生徒は、「内地人」であるという自覚と誇りを強める一方、自分たちが「内地」に住む人々から除け者にされる存在でもあるという複雑な意識を有していたことである。

以上のことから、「内地」成育型生徒と朝鮮成育型生徒は、いずれも植民者たる「内地人」という共通性を有しながらも、異質な存在であったといえる。

また、朝鮮人生徒と「内地人」生徒との比較では、制度面においては両者に大きな相違はないが、実生活レベルにおいてはいくつかの相違がみられた。これらのことから、「内地人」生徒は、朝鮮人生徒よりも入学競争率は低く、学力は朝鮮人生徒に劣っていた、にもかかわらず、学校内でのイニシアティブは常に掌握している存在であった、と特徴づけることができる。つまり、「内地人」であることそれ自体が、いわゆる「皇国臣民」の模範としてリーダー的役割を担うための条件となっていたのである。

本稿で明らかにした「内地人」生徒の多様性や「内地人」生徒と朝鮮人生徒の関係性は、大邱師範学校だけに限定されるものではない。敷衍すると、大邱師範学校でみられた「内地人」生徒と朝鮮人生徒との関係は、植民地朝鮮社会全体における「内地人」と朝鮮人との関係に通ずるものであり、また、「内地」成育型生徒と朝鮮成育型生徒それぞれに異なる特徴を見出すことができたことから、「内地」成育型／朝鮮成育型の区分は、師範学校のみならず、植民者たる在朝日本人の存在様態を解明する上でも有用な枠組であると考えられる。

本稿で対象としたのは、大邱師範学校であるが、植民地朝鮮には生徒の大多数が「内地人」であった京城師範学校をはじめ、他にも師範学校が存在した。これら他の師範学校における「内地人」生徒の実態を把握してこそ、植民地朝鮮における師範学校の「内地人」生徒の全貌をつかむことができ、その中に本稿を位置づけることができと考える。したがって、他の師範学校における「内地人」生徒の実態を明らかにしていくことが今後の課題であることを付け加えておきたい。

- 1) 梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会『朝鮮史と日本人』（梶村秀樹著作集第一巻、明石書店、1992年）は、在朝日本人の意識、行動について論及したものである。また、在朝日本人の多様性、個性性を指摘したものとして、高吉嬭の『〈在朝日本人二世〉のアイデンティティ形成—旗田巍と朝鮮・日本—』（桐書房、2001年）がある。高は、「在朝日本人一世と二世とは、〈植民者〉として朝鮮にいたという共通点はあるにせよ、朝鮮や日本に対する想いやその精神構造において異なっていたはずである」（同書、54頁）と述べ、「在朝日本人二世」である旗田巍に焦点をあてている。教育関係では、稲葉継雄の『旧韓国～朝鮮の日本人教員』（九州大学出版会、2001年）、『旧韓国～植民地朝鮮における「内地人」教育の実証的研究』（平成14～16年度科学研究費補助金 基盤研究（C）（2）研究成果報告書、課題番号14510299、2005年）がある。また、対象時期が植民地期ではないものの、釜山開港から併合に至る植民地化過程における日本人の朝鮮進出の背景やそこでの経済活動に関する論考である、木村健二の『在朝日本人の社会史』（未来社、1989年）がある。1876年の開港から植民地期を含め、1945年の日本敗戦までを対象とし、「在朝日本人史の

- 全体像」に迫る試みとして高崎宗司の『植民地朝鮮の日本人』（岩波書店、2002年）がある。
- 2) 片桐芳雄「官立大邱師範学校・覚え書き」、『教育学年報』、第9巻、世織書房、2002年。
 - 3) ※イ・ギフン「日帝下植民地師範教育—大邱師範学校を中心に—」、『歴史問題研究』、第9号、歴史批評社、2002年。※はハングル文献。以下同。
 - 4) 朴永奎「植民地朝鮮における教員養成—大邱師範学校を中心に—」、『九州教育学会研究紀要』、第30巻、九州教育学会、2002年、242頁。
 - 5) 同上。
 - 6) 中学校附属臨時小学校教員養成所、高等普通学校附設臨時教員養成所、官立高等普通学校の師範科、教員速成科、官立女子高等普通学校の師範科などにおいて養成された。
 - 7) 「第二次朝鮮教育令」第13条、1922年。
 - 8) 京城師範学校初代校長を務めた赤木萬二郎は、京城師範学校の使命について、「朝鮮全道の師範学校の中心となるべく、其の責任の重いことを感知して居る」（朝鮮総督府『朝鮮』、3月号、1922年、101頁）と述べている。
 - 9) 1943年度までの入学者についてみると演習科は2870名中2269名（約79.1%）が「内地人」生徒、601名（約20.9%）が朝鮮人生徒であり、普通科は2118名中1612名（約76.1%）が「内地人」生徒、506名（約23.9%）が朝鮮人生徒である（『官立京城師範学校一覧』1943年度版、30-32頁）。
 - 10) 平均人数、平均経費（予算額）は、朝鮮総督府学務局『朝鮮教育要覧』（1926年度版、105-109頁・1929年度版、111-114頁）の数値より筆者が算出したもの。
 - 11) 1930年に甲種講習科（～1931年）・乙種講習科（～1934年）、1934年に短期講習科（～1940年）、1940年に特設講習科（～1944年）、1942年に臨時講習科（～1943年）が設置されている（※『大邱師範尋常科誌』大邱師範尋常科同門会、1991年、附表（2）参照）。
 - 12) 「師範学校規程」第87条、1938年。
 - 13) 『朝鮮総督府官報』第896号（1929年12月27日）、第1194号（1930年12月24日）、第1476号（1931年12月7日）、第1777号（1932年12月9日）、第2073号（1933年12月6日）、第2374号（1934年12月8日）、第2687号（1935年12月27日）、第2993号（1937年1月9日）、第3267号（1937年12月4日）、第3879号（1939年12月23日）、第4175号（1940年12月20日）、第4479号（1941年12月29日）、第4775号（1943年1月4日）、第5072号（1943年12月29日）、第5371号（1944年12月29日）に掲載された大邱師範学校の各年度生徒募集要項を参照。
 - 14) 2003年3月から2004年5月にかけて筆者が行なったもの。本稿で証言を引用または参考にした対象者とその調査概要は以下のとおりである。
 - 石井忠雄（大邱師範学校尋常科第3期生）：2003年12月6日、7日、石井氏宅において行なう。インタビュー形式。
 - 藤井祐正（同第2期生）：2004年1月28日、藤井氏宅において行なう。インタビュー形式。
 - 申鉉夏（同第14期生）：2003年3月1、2日、九州大学箱崎文系地区「二十一世紀交流プラザ」において行なう。インタビュー形式。
 - 15) 平田伝與門「師範教育革新論」、『帝国教育』、1914年6月号、帝国教育会、91頁。
 - 16) 帝国教育会調査部「師範学校に関する調査」、『帝国教育』、1917年7月号、4-8頁。
 - 17) 2004年1月28日、藤井祐正氏からの聞き取りによる。
 - 18) 「朝鮮公立学校官制」第3条。
 - 19) 「朝鮮総督府及所属官署職員ノ加俸ニ関スル件」第1条。
 - 20) 「宿舍料支給規程」。
 - 21) 『京城師範学校史 大愛至醇』醇和会、1987年、547頁。
 - 22) 岸米作『流転教育六十年』私家本、1982年、42頁。
 - 23) 同上、52頁。
 - 24) 2003年12月6日、石井忠雄氏からの聞き取りによる。
 - 25) 弓削幸太郎『朝鮮の教育』自由討究社、1923年、264-265頁。
 - 26) 「教員心得」、1916年。
 - 27) 2004年1月28日、藤井祐正氏からの聞き取りによる。
 - 28) 朝鮮総督府『朝鮮に於ける内地人』、1924年、4-5頁。
 - 29) 幣原坦『朝鮮教育論』六盟社、1919年、304-306頁。
 - 30) ※『大邱師範尋常科誌』、233頁。
 - 31) 同上、189頁。
 - 32) 同上、282頁。
 - 33) 2003年12月6日、石井忠雄氏からの聞き取りによる。
 - 34) 同上。
 - 35) 向井盛「内地修学旅行の追憶—感想文集—」、『文教の朝鮮』、1934年7月号、186頁。
 - 36) 同上、185-186頁。
 - 37) 幣原坦、前掲書、306頁。
 - 38) 渡邊信治「朝鮮教育に対する所感」、西村緑也編『朝鮮教育大観』朝鮮教育大観社、1932年、30-31頁。

(57頁へ続く)

(31頁より続く)

- 39) 入学志願者数は朝鮮総督府『調査月報』(第4巻第10号, 1933年, 58頁), 入学者数は※『大邱師範尋常科誌』(1991年, 108頁)を参照し, 競争倍率はそれらの数値から筆者が算出したもの。
- 40) ※『大邱師範尋常科誌』, 361頁。
- 41) 同上, 357頁。
- 42) 申鉉夏『恨の海峡』石風社, 1996年, 90頁。
- 43) ※『大邱師範尋常科誌』, 350頁。
- 44) 岸米作, 前掲書, 52-53頁。
- 45) 2004年1月28日, 藤井祐正氏からの聞き取りによる。
- 46) 2003年12月6日, 石井忠雄氏からの聞き取りによる。
- 47) ※『大邱師範尋常科誌』, 108頁。
- 48) 岸米作, 前掲書, 53頁。
- 49) 尾高朝雄「朝鮮教学論」, 『文教の朝鮮』, 1944年6月号, 15-16頁。
- 50) 2003年3月1, 2日, 申鉉夏氏からの聞き取りによる。
- 51) 『京城師範学校史 大愛至醇』, 443頁。